

世界最難関大学ミネルバが提起する高等教育の未来像

創立3年で学生のクリエイティブ思考力の評価が全米トップとなり、約150人の募集に世界から2万人以上が受験する最難関校。それが世界の7都市をキャンパスにするミネルバ大学だ。最高の教育を、適正な価格で、より幅広い人々へ——真の高等教育革命を目指す、その理念と実践とは。創立者ベン・ネルソンのビジョンに深く共鳴し、日本連絡事務所の代表を務めた山本秀樹氏に伺った。

入澤誠 取材執筆
宮村政徳 撮影



インタビュー

〔Dream Project School 代表〕

山本秀樹 Yamamoto Hidetoki

ず、多様性の点でおおいに疑問符が付きまします」

くわえて、高額な学費負担は経済面で教育格差を生み、才能や学習意欲がありながら希望する大学へ進めない若者の機会を奪うことになる。ネルソンが目指したのは、これらの問題を解決するための「理想の大学教育」づくりであり、ミネルバ大学はその先駆的な取り組みだった。

現在の大学を取り巻く深刻な状況、それに対する疑問と憂慮はハーバード大学をはじめ一流大学で要職を務めた教授たち、ビジネス界で活躍する卒業生たちに静かに、しかし確実に共有され、ネルソンのもとには望み得る最高のスタッフ「*」が集結する。かくて、ミネルバ大学は多くのメディアに注目され、17年度にはMITやカリフォルニア大学バークレー校をはるかにしのぐ169カ国の約2万人が受験、名だたる名門大学の合格を辞退して進学する学生も現れるまでになった。

「同時に、アイビリーグの学生ですらインターンを許さなかったトップクラスの研究所で、ミネルバ大学の1年生がプロジェクトに参加を認められ、1年生終了時のクリエイティブ思考力を測定する外部テストで、全米1位の成績を収めるなど、『今世紀最初の真のエリート大学をつくる』とのネルソンの試みは今、大きく花開いています」

考え抜かれたオンライン授業で世界の都市がキャンパスになる

ミネルバ大学には、施設としてのキャンパスが存在しない。学生は4年間の在学中に世界の7都市（サンフランシスコ・ソウル・ハイデラバード・ベルリン・ブエノスアイレス・ロンドン・台北）を巡って、大学が借り上げた現地の学生寮で共同生活を営み、日々の授業のほか、現地の企業や行政機関

NPOなどの協働プロジェクトやインターン活動などの実践的取り組みを行う。

「世界各地を巡ることで、学生たちは滞在地ごとの多彩なプロジェクト学習を通じ、多様で濃密な異文化体験を強烈に味わいます。いわば『都市をまるごとキャンパスにする』という発想で、これにより特定の国や文化に偏った見方や考え方は徹底的に問い直される一方、1学年40〜50カ国の約150人が営む寮生活においては、自分の属性や個性という面を否応なく意識させられるのです」

国籍や性別はもちろん、欧米のエリート校出身者から、中等教育の不十分な開発途上国の若者まで、社会階層も驚くほど多様な環境に身を置くなか、学生は授業やプロジェクト学習で学んだことを常にブラッシュアップしていくことになる。当然、コミュニケーションにおいても相手の話を正しく聴き、理解する力、状況の変化に柔軟に対応できる能力が養われ、才能と向上心にあふれつつも、驚くほど謙虚な人間性が陶冶されるのだという。

「このように、世界中を巡るといふ他に類のないアイデアを可能にしたのが、すべての授業をオンラインで行う画期的なシステムです。ミネルバ大学では、独自のプラットフォーム『アクティブ・ラーニング・フォーラム』の活用により、学生は世界のどこに滞在していても各国の一流教授陣からリアルタイムで授業を受けられる。真の意味で『世界に開かれた大学』といえるでしょう」

ミネルバ大学では講義形式による授業が禁止され、19人以下の学生が主体のセミナー形式の学びが徹底されている。毎回の授業では、学生が寮の自室からアクティブ・ラーニング・フォーラムにログイン。その日の議論のテーマや学習目的となる

教育を取り巻く状況への疑問から生まれた「真のエリート大学」

ローマ神話における知恵の女神の名を冠した、ミネルバ大学 (Minerva Schools at KGI) [*1]は2014年9月に開校した。「高等教育の再創造」を掲げる教育事業会社ミネルバ・プロジェクトにより立ち上げられた同大学は、その誕生自体が「事件」というにふさわしい画期的なものだった。「創立者ベン・ネルソンは、名門ペンシルバニア大学ウォートン校を卒業しシリコンバレーで成功を収めた起業家[*2]ながら、現在の大学教育の質に大きな疑問と問題意識を抱いていました」

早くからネルソンの思想に共鳴し、直接その意見を聴く機会にも恵まれたという山本氏は、ネルソンが抱いた問題意識を次のように要約する。

「第一は、大学と実業界の『社会に出る準備』や『期待している職業技能』への意識の乖離です。14年にギャラップ社が実施した意識調査で『学生は社会で活躍できる準備ができていると思うか』との質問に、大学経営者の96%が『そう思う』と答えたのに対し、企業側はわずか11%、このギャップは大きな問題といえるでしょう。

一方、こうした認識の差の背景にあるのが、教育方法の効果と偏った国際経験の問題です。前者であれば、情報技術を駆使した教育、いわゆるEdTechが急速に進化しているにもかかわらず、既存のほとんどの大学では社会から隔絶したキャンパスで、教員が多くの学生に向けてひたすら話すだけの講義形式が今なお主流です。後者の国際経験という点でも、海外で学ぶ学生は世界のわずか2.5%とごく少数のうえ、その多くが北米と欧州をはじめとする西欧文化圏でしか学んでおら

コンセプトなどが教員から簡単に解説され、その後は画面に表示される選択型の質問への投票と、それに基づいたディベートやディスカッション、グループワークが次々に行われていくのだ。

「細部まで考え抜かれた設計は、たとえばディベートの際の学生ごとの発言量や、ほかの学生の『いいね!』マークが画面上に表示できるほか、個々の発言へのルーブリック(学習到達度の観点と尺度)による評価を課題にするなど、徹底した参加型授業を可能にしています」

これにより、従来に比べ圧倒的に高密度の授業を効率的に実施できるだけではない。学習評価の面でも授業後にすべての学生の発言データに基づいた詳細なコメントと採点がフィードバックされ、個々の学生の弱点や強みへのアドバイスを通じ、確実なフォローアップが行えるのだ。

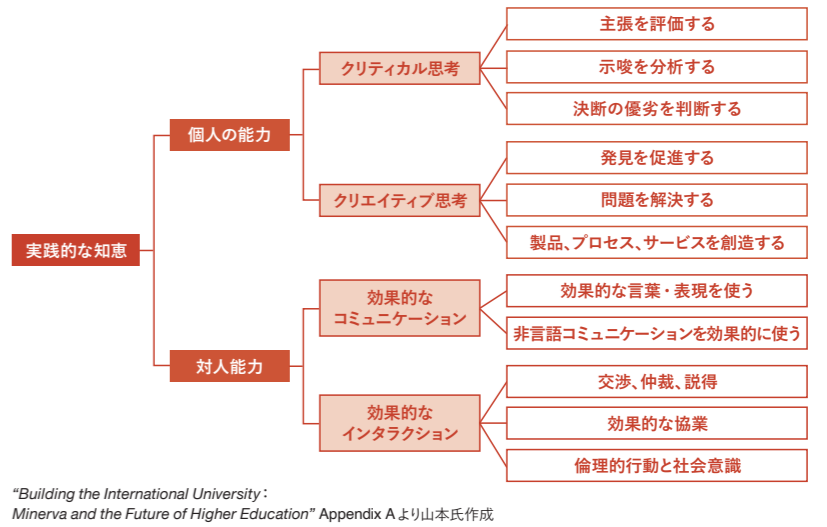
「学び方を学ぶ」カリキュラムで自律的で実践的な能力が身につく

「こうしたなか、学生たちはオフラインで寮の一室に集まり、授業の続きの議論がさらに白熱することも少なくありません。そこにはまた、ミネルバ大学独自のカリキュラムで鍛えられた『実践的な知恵』(22頁の図)の存在が大きいと思います」

ここでいう「実践的」とは、けっして職業訓練用の専門知識ではなく、記録された事実の集積でもない。それは自ら使い込んでいくことで、生涯にわたる発展可能な技能と理論を含んだ知識、変化の激しい世界と向き合い、なりたいた自分を実現するための知恵なのだ。

「入学時に学部に分けられ、選択式の一般教養から始める既存の大学とは違い、ミネルバ大学では1年次には選択科目がありません。すべての学生

■ 図：ミネルバ大学が考える「実践的な知恵」の概略図



「これにより、学生は異なる場面、状況で自分の思考やコミュニケーション能力が進化しているかを確認できます。まずは予測不能になる現代に不可欠な職業スキル——問題解決力やクリティカルな思考力、創造力や判断力など、自ら考え、行動する能力を養成するという点で理想的なカリキュラムといえるでしょう。こうした設計自体、まさに建国当時のアメリカで良き市民、シチズンシップを育てる目的で設立されたリベラルアーツ・カレッジ[*4]の伝統に連なるものです」

従来の知識偏重型の学びに対し、「学び方を学ぶ」このプロセスを経ることで各人の専門知識は高い汎用性を持ち、卒業後も幅広い分野で応用が可能になるのである。

合格基準は多様性と理念の共有 理想の大学づくりが目指すもの

大学経営という点から見ても、キャンパスをはじめとする諸施設(図書館、グラウンド、体育館やプールなどは、滞在都市にあるものを利活用)の建設・維持を必要としないミネルバ大学の運営費は、既存の大学よりはるかに少なくて済む。完全なオンライン授業で、教員は自分の現住地から移動する必要がなく、移動コストや時間のロスもない。「物理的、心理的なハードルが下がることで、テニユア(終身在職権)も専用の研究室もなく、給与は授業を行った時間分のみという条件にもかかわらず、世界中から超一流の教員がこぞって応募してきます。一方、こうしたコストダウンにより、アメリカにおけるトップ・エリート大学の3分の1未満(年間約150万円)という適正な学費が実現。優秀な学生へ広く門戸を開くことにもつながっているのです」

学生の選抜については毎年8月から翌3月まで、オンラインによるオープン形式で行われ、既存の一流大学が重視する国籍、人種、性別や経済状況などは一切不問。選抜基準は、その学生が「何者か(個人情報と連絡先、学校での成績)」「どのように思考するか(思考・コミュニケーション能力の評価試験)」「何を成し遂げてきたか(学校の課題以外で実施したプロジェクトとその成果)」だけで、特に3つめの点は活動の社会的重要度や認知度、創造性、問題解決における寄与の度合いなどが詳細に検討される。

「選抜の目的は、その学生本来の才能や実力とともに、ミネルバ大学の教育コンセプトに適合しているかを判断することであり、落とすための試験ではありません。けっして万人向けの大学ではないからこそ、何よりも多様性を重視し、世界を巡りながらハードなカリキュラムをこなしていく覚悟のある若者が求められます」

そのため、ミネルバ大学では当初からナショナル・ハイスクール・スカラースや国際バカロレア機構[*5]などにアプローチし、自分たちの理念に共鳴してくれる優秀で冒険心に富む学生に対して積極的にリクルーティングを行った。

「ネルソン自身も『対抗馬が出てきてほしい』と言っていますが、単なるフォロワーにとどまらない新たなプレーヤーが市場に参入することで、大学教育の再創造」というミネルバ大学の試みは受け入れられていくでしょう。

私が代表を務めるDream Project Schoolも、志ある人が、どこにいても自分の夢に向かって学べる環境を創造すべく、革新的な教育を導入したり、それを目指す教育機関の広報・運営・経営支援を行ったりしており、日本における新たな波を

が、幅広い分野の題材をもとに『実践的な知恵』を効果的に理解・運用するための115項目にわたる技能のコンセプトを身につけ、学外でのプロジェクト学習で実践的にこれを深めていきます」

そのうえで2年次では、自らの専攻を決めて研究対象をじっくり探索。3、4年次を通して教授や外部の専門家の支援を受けながら、研究テーマについて理論と実証研究を深め、最終的に自分の発見について発表する。1年次に徹底的に学ぶ115のコンセプトは、4年間を通じて学生のおの「核」となり、また学習評価においても大きな柱であり続けるのだ。

それでも周りの皆は諦めたのか腹を括ったのか、いずれにせよ、僕のわがままな苦悩には気付いてもない様子で大人になっていったこと。そこから逃げるように学校をやめてカナダに飛んだこと。森林の奥に潜むそのキャンパスでは世界中のあらゆる才能ある人たちが楽しく過ごしていて、毎日新たな発見があったこと。それによって2年間で大きく書き換わった僕の価値観のこと。

その価値観の変化こそが、ミネルバという新たな価値観を提示する大学に出願している理由なのだ、息継ぎも忘れるようにまくし立てた。

外の世界は圧倒的で、一步踏み出した僕の自信すら一瞬で崩れ去った。でも、それを受け入れたことで自然に「何も成し遂げていない」という答えが出てきて、今こうして僕は世界を巡りながら学び続けている。

ミネルバでの学びは不思議だ。人類の有する全ての知識を広大な夜空に喩えてみよう。夜の帳に浮かぶ星々のひとつひとつが何かしらの知識だと思ってもらえればいい。いわゆる伝統的な大学で得る学びが、天体望遠鏡で視界に収まる幾つかの星をじっくり見つめるようなものだとすれば、ミネルバのそれは肉眼と双眼鏡で夜空の点と点を繋ぐようなものだと僕は思う。先に大きな絵を見ることでまず知識の交差点を認識し、必要に応じて解像度を上げる。そうすれば目の前の課題に対して複数の視点からアプローチすることが可能になり、汎用性と専門性のバランスが自然にとれていくのだ。

さて、3年間飛び回りながら僕が学んだこと。それは四十人四十一脚に通ずると初めに言った。40人も人が集まれば、体格も脚の長さも足の形も当然のように違う。いきなり足を結んで走れと言われてもできるわけがない。ひとりが転ぶだけで残りの39人も全員転ぶ。そして、それは互いの脚の長さを責めても解決するものではない。

この構図は、今の世界と非常に似ている。

世界に存在する多様な人々が呼吸を揃え、互いのリズムに耳を傾けながら自分の動きを微調整して周りとのバランスをとり、共通の目的を達成しなければならぬ。四十人四十一脚ではゴールは25m先のテープだが、現実のゴールは例えば持続可能性や機会平等、紛争解決等々である。参加人数も40人ではなく70億人なので、途方もなく難題である。

ただ、四十人四十一脚とて、一人ひとりが両隣の人と息を揃えればゴールには辿り着ける。それが70億人一列に並んでいても、理屈は同じはずだ。まずはごく身近な人からで良い。周りのリズムを聴くことから始めてみたいと思う。

寄稿 ミネルバ大学では、2020年現在、日本出身の学生が7人学んでいる。4年次に在籍中の日原翔氏に、入学のきっかけと学んだことについて寄稿していただいた。

ミネルバの梟は、 夜空に瞬く星を繋ぐ

日原翔 Hihara Sho

四十人四十一脚という競技をご存知だろうか？ 僕の母校で毎年行われる体育祭の名物競技で、二人三脚の要領で40人繋げて走るだけ。当然、二人三脚に比べて段違いに難しいが、練習を積むことで少しずつ速く走れるようになる。自分がミネルバで3年間過ごして感じたことの大部分は、この四十人四十一脚に通ずるものがあると思う。

ミネルバの存在について知ったのは高校3年の時だ。高校2年時にそれまで通っていた横浜の高校を中退し、カナダの人里離れた高校で寮生活を送っていた。そこは一風変わった高校で、80以上の国や地域から奨学金をもらってやって来た僅か160人程度の学生達が、共同生活をしながら学業に励み、地元の人や有難い際には海難救助をするような学校だ。そんな学校でさらに一風変わった先輩が、ミネルバについてワクワクしながら語っていた。彼自身は結局ミネルバに進学することはなかったが、その口から溢れ出る熱量が、初めは話半分に聞いていた僕を徐々に高揚させたのを覚えている。気がつけばそれまでたてていた計画や志望校をそっこのけに、ミネルバに入学したらあれしよう、これやろう、といった考えに夢中になっていた。

実際にミネルバに入学するまでの道のりは、それまで想像していた大学受験のプロセスとはかなり異なっていた。というものは、僕はミネルバ出願のために準備したり勉強したりすることが一切なかったのだ。なぜかという、この大学は出願時にテストの点数や受賞歴ではなく、「これまで何を成し遂げてきたのか」というシンプルに見えて大きな問いを投げかけてくるからだ。これは対策や準備ができるものではない。それまでの人生を振り返り、そこに何かしらの物語を見出し、自分を受験生Aではなく日原翔というひとりの人間として曝け出す。そこには僕と大学のオープンな対話が存在していて、その対話を通じて互いに選びあったのだと感じている。

3年半前、この問いに対して僕は「何も成し遂げていない」という回答をした。もともと日本の学校を楽しくも窮屈に感じていたこと。学年が上がるごとに近づく大学受験のプレッシャーのこと。机に向かって勉強なんかしたくないのに、大人になつてなりたくないのに……僕がおかしいのだろうか？

起こしたいと思っています」

最近では、広く社会人に向けたプログラムも重視し、ビジネスパーソンのリカレント教育でも存在感を示しているというミネルバ大学。単なる教養や知識ではない、学びそのものの実践的な知恵を身につけられる可能性は、ますます広がりを見せつつある。今日の最先端が明日のスタンダードになる未来は、思いのほかに近いかもしれない。

〔取材日：4月7日@Zoom〕

- 注**
- *1 事業主体のミネルバ・プロジェクトが、クレアモント大学系列のケック大学院(Keck Graduate Institute)と提携するかたちで大学を設置したことから、この名がついた。
 - *2 2000年から2010年まで、オンライン写真印刷会社スナップフィッシュで財務担当取締役とCEOを務めた。
 - *3 アカデミック部門トップは、ハーバード大学で30年以上にわたって心理学、認知科学、脳科学を教え、社会科学部長を務めたステファン・コスリン教授(現学長)。テクノロジー部門トップにはシリコンバレーの著名なエンジニアでXopitのCEO、ジョナサン・カツツマンが就任した。
 - *4 学生が幅広い教養を身につけることを目的とした、多くが全寮制の私立大学。アメリカ最創成期の大学として、いずれも独立時の13州に位置する。
 - *5 ナショナル・ハイスクール・スカラースは、アメリカの公立高校教員組合で、自らの優秀な生徒が奨学金により一流大学へ進むことを目的のひとつとする。国際バカロレア機構は、世界共通の大学入学資格の授与を行う非営利団体。
- 山本秀樹**
やまもと ひでき

慶應義塾大学経済学部卒業後、東レなどを経て、住友スリーエム(現・スリーエムジャパン)の2つの事業部でマーケティング部長を経験。MBA取得のためのケンブリッジ大学留学で、その学習環境・スタイルに深く感銘を受け、日本でも同様の教育の提供を模索する。2014年の独立後、ミネルバ大学の存在を知り、コンタクトしたことから日本連絡事務所代表となる。17年代表を辞し、同大学で得た「教育の再創造」というミッションをより多くの人に届けるべく「Dream Project School」を起業。著書に『世界のエリートが今一番入りたい大学「ミネルバ」(ダイヤモンド社)などがある。